

垂水海軍航空隊 — 垂水市終原 —

普通科雷爆練習生教育の航空隊として 太平洋戦争たけなわの昭和十九年二月一日開隊 九一式航空魚雷の整備教育を実施した

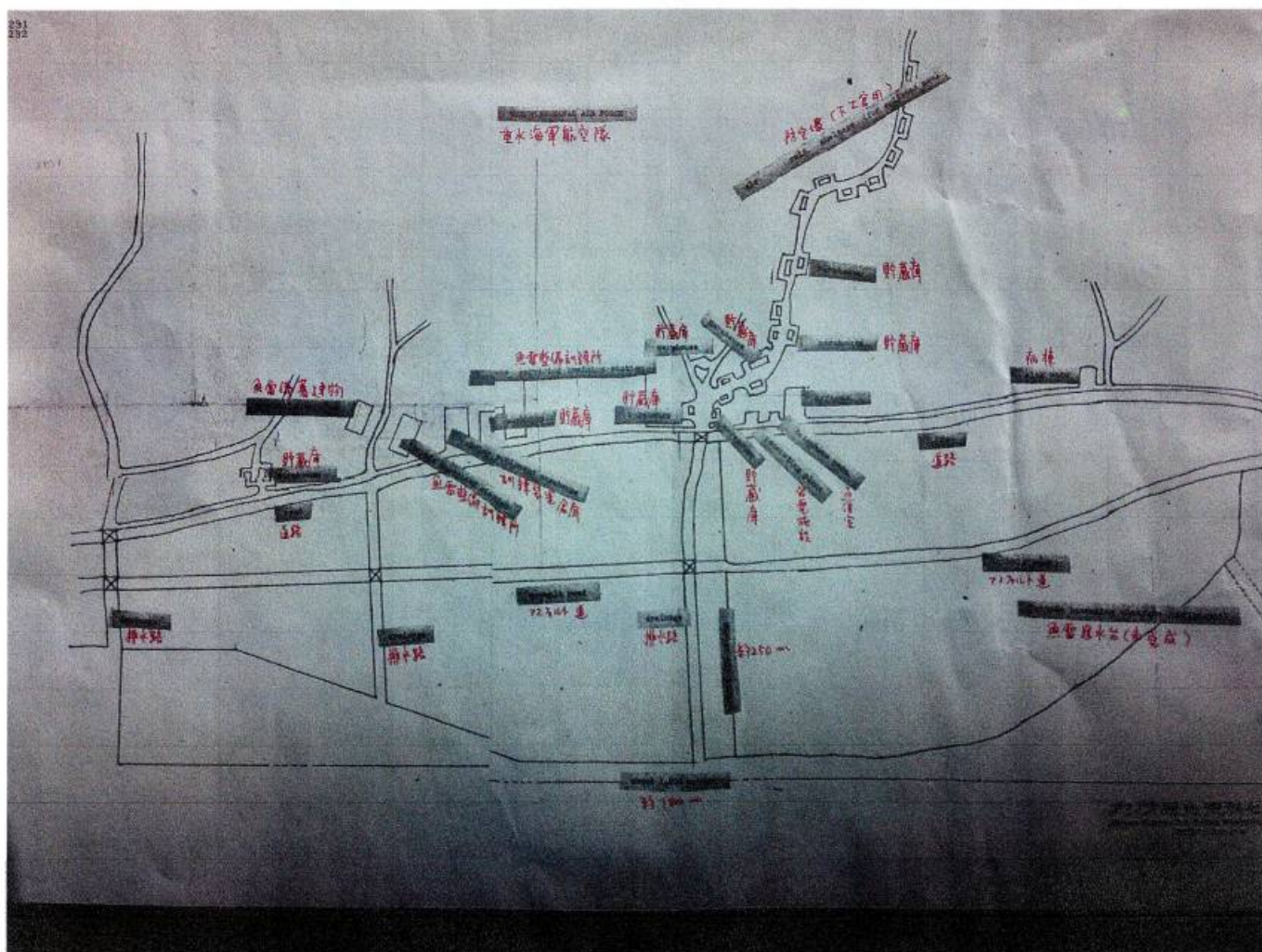
ここに集う普通科雷爆練習生約八百名 甲種飛行予科練習生約六百名が卒業して 各戦線に参加した

昭和二十年八月十五日 終戦とともにその役割を終えた

私の感想 (垂水海軍航空隊について)

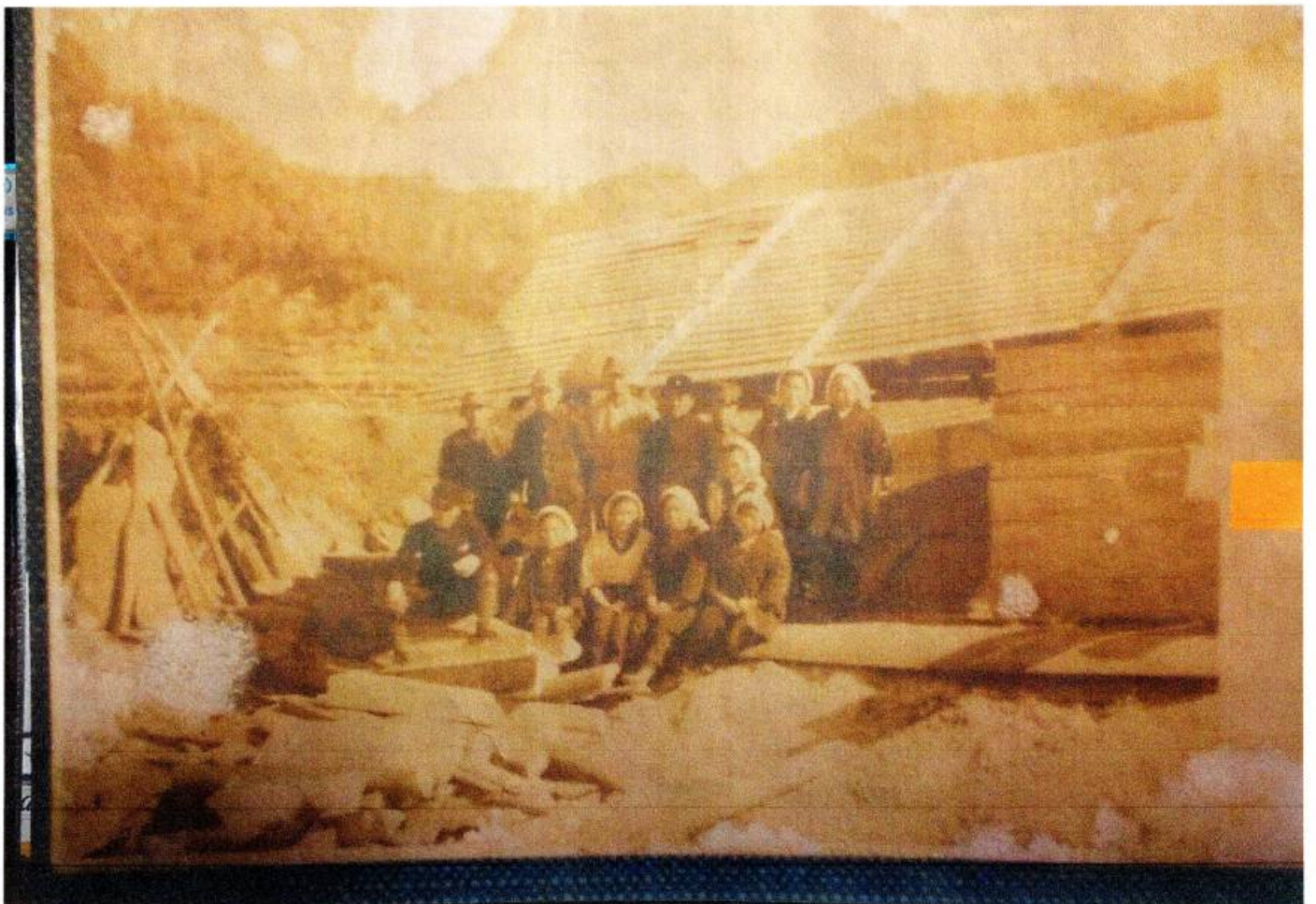
一 飛行機が一機もありませんでした。
 一 魚雷雷撃隊の専門部隊で整備も砲撃も行なわれていた。
 一 雷撃隊には私が教官として毎日同行して訓練を指導してまわった。
 一 訓練場所は海沿いの内湾、横島に向かう針路、それと大和船(大和丸)で知床島の沖あたりを整備する魚雷を雷撃隊に運ぶ雷撃機が全速で進むまわりの船に投下、船の真下を雷が走り出したら、雷が着く数分大威行、雷が上った魚雷を回収する途につく。
 この訓練には医師一人、私と同行しました。





【海潟造船所跡の航空写真：昭和22年】





太平洋戦争中の昭和 17 (1942) 年、ガダルカナルの戦いによって多数の輸送船舶を失なった日本政府は、資材不足の状況下で木造機帆船による輸送力拡充を図ることとし、昭和 18 (1943) 年 1 月 20 日、「木船建造緊急方策要綱」(閣議決定)を公表して、木造船の大量建造に乗り出した。

この時期、海務院の要請に応じて、日本郵船や大阪商船、三井船舶などの大手商船会社は木造船会社を設立、主として 250 総噸型戦時標準木造船の建造に主力を注ぐこととなった。

錦江湾は火口に海水が入り込んでできた湾であり、さらに海潟の臨登地区の海岸は水深が急速に落ち込み、船を進水させるにも格好の地であったため、この地に昭和 18 (1943) 年 7 月 23 日、日本郵船系の「海潟造船株式会社」(資本金 300 万円、6 万株)が設立され、社長には本社の寺井久信社長が現職のまま就任した。

海潟造船所は、同じく戦時標準木造船を製造していた鹿児島・枕崎・串木野・内之浦・出水の県内各造船所とは異なり、戦時標準木造船では最大規模の 250 総噸型を専ら製造した。造船所では会社職員、技術者や朝鮮人労働者を含め約 2 千名が働いていた。県内各地から動員された者が多く、地区内の民家や温泉場の旅館などに分宿していた。

昭和 18 年 12 月 14 日、海潟造船所においてはじめて「第二十一郵船丸」が進水して以来、戦時中に建造された木造機帆船は約 30 隻、完成後は海軍に徴用船として輸送船団に編入され、台湾―中国大陸間の資源還送業務などに従事した。しかし、その多くが戦時中の敵襲を受けるなどして沈没している。

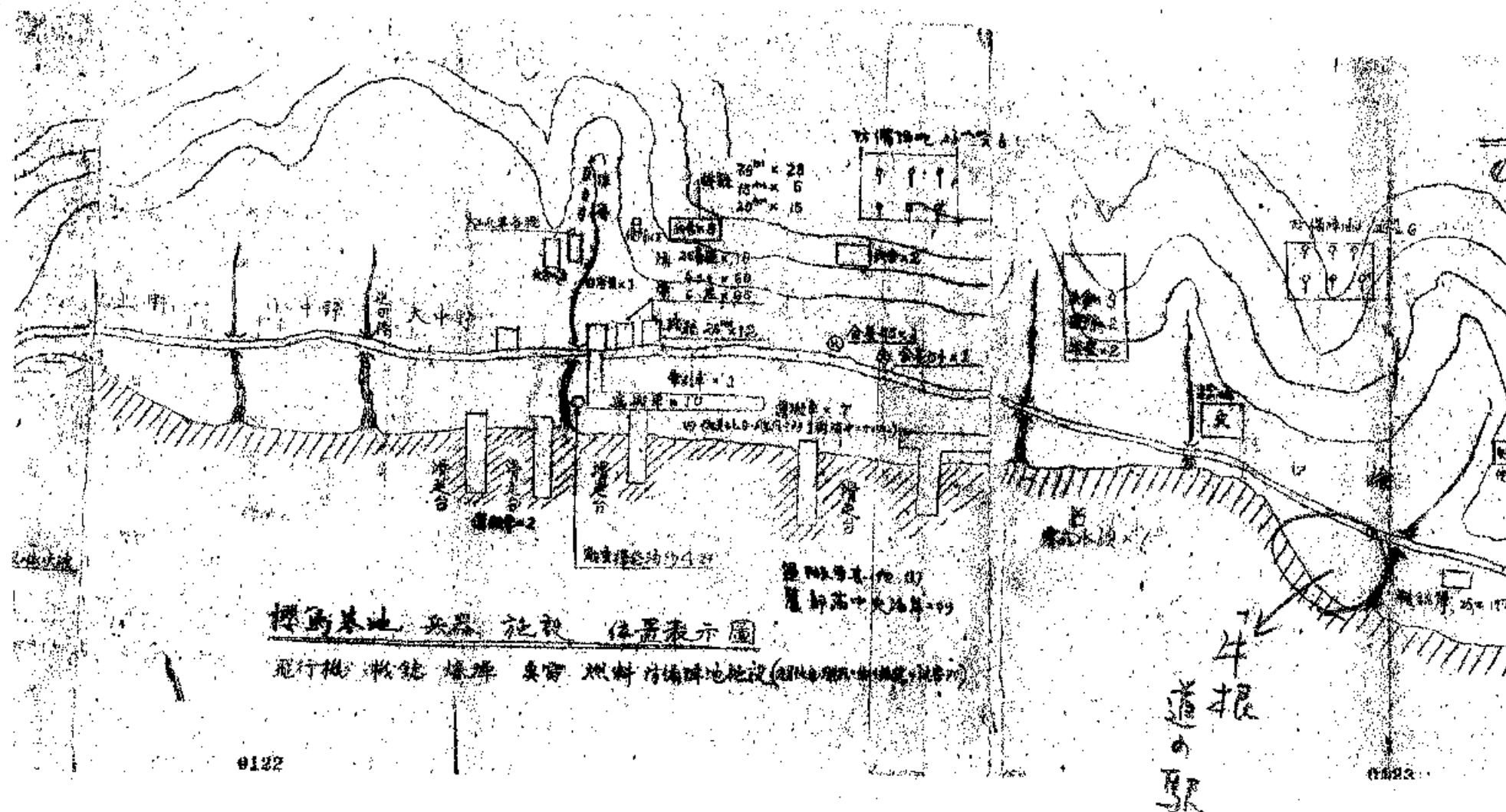
終戦後、海潟造船所は昭和 20 (1945) 年 9 月 17 日の枕崎台風及び翌 21 (1946) 年 2 月の桜島昭和噴火などの被害を被り、同年 11 月に解散した。現在、造船所の構築物は残っていないが、干潮の時には浜辺に破壊されたコンクリートや石垣など、造船所の遺構が姿を現している。

平成 28 (2016) 年 1 月 日
垂水市協和地区公民館

参考資料

「日本郵船七十年史」

「鹿児島日報」ほか



九州海軍航空隊桜島基地（松ヶ崎地区）にちなんで

松ヶ崎郷土史研究会 下世 吉美

はじめに

先日、垂水郷土史研究会の瀬角会長から、戦後間もない昭和20年8月31日付、引渡品目録として当時の桜島基地の施設や兵器等の配置が、要図付きでまとめられている貴重な資料を頂きました。

終戦当時、私は松ヶ崎国民学校（現在の小学校）の6年生でしたが、あの当時のことを今更のように想いをはせることでした。小学5・6年生の視野の中で、当時見聞したり体験したことを断片的ではありますが、思い出の中から拾ってみたいと思います。

① 麓の海岸に、水上機が初めて着水したときのこと

昭和19年の秋口、確か二学期が始まった9月か10月、燃島方向から入ってきた水上機が麓の海岸に接岸し、生まれて初めて間近に見る飛行機に、集落をあげて大人も子供もすっかり興奮し、国旗を持参して万歳を唱和するなど、たいへんな歓迎ぶりでした。

開戦当初から昭和17年までの華々しい進撃に反し、同18年5月には、アツツ島守備隊の玉碎、同19年の6月にはサイパン島の陥落と悲報が続く中、兵隊さん頑張ってくださいという願いもありました。

② その後の麓集落における海軍の活動状況

桜島基地設営の先遣隊だったのでしょうか、2機3機と増えてきて搭乗員の山下栄吉さん宅に、そして整備や後方業務を携わる兵隊さん方は、現在の麓自治公民館を利用していました。

東小路の海岸に樹齢何百年を数えるアコウの太木が現在もあります。波打ち際からこの木の根っこまで、鉄板を敷きフロートに乗せる台車を利用して引き上げていました。

飛行機は、水上偵察機で早朝からまた夕方、轟音を響かせ飛び立っていました。

③ 前崎沖での飛行機事故

水上機が飛来してきてから、2ヶ月ほど経った頃だったのでしょうか、前崎（現在のグローバルオーシャン付近）に駐機していた水上機が、飛び立ってすぐ失速し、対岸の大正溶岩の手前に墜落、搭乗員3名の方が亡くなるという痛ましい大きな事故が発生しました。子供の間の話では、水上機は海に落ちてもフロートがついているから安全だなどと言ってましたが、なんと海面にフロートだけが見えている状態でした。集落総出で整備兵の方々に協力する形で、機体に巻いたロープを地曳き網の巻き取りで機体を海岸に引き寄せ、薪を割る「よき」で機体を破り搭乗員の方々を自治公民館に安置されました。「子供には見せるな、将来軍人にならんといかんだから」と古老から大声で制止されたのを覚えています。

④ 大中野地区に基地建設

昭和19年の暮れの頃からでしたか、前崎の事故の頃から大中野地区（松ヶ崎小学校から大中野の網元・森山家付近まで）を中心に、急速に基地建設が進められたようです。駐機場には板が敷き詰められ板と板の間に芝を植える作業には、当時5年生だった私共も参加致しました。山手には、軍の兵舎や施設の建設も進んでいましたが、学校の教室なども一部軍が使用するようになり、校舎の屋根にも木の葉っぱなどで偽装が施されるようになりました。

⑤ 当時の学校や地域の状況

昭和20年に入ってから、登下校時に遭遇する空襲を想定した

指導も行われていましたが、上空で空中戦が行われたり、国分の基地や海潟造船所が空襲を受けるようになった2月から3月には、麓地区と辺田地区に別れ学年毎に、それぞれの地域の枇杷畑や神社の境内などを利用して授業が行われました。

このような状況の中、各家庭でも防空壕作りに取り組んでいましたが、6月17日、鹿児島市内が夜通し空爆を受け、桜島を真っ赤に染めているのを見たとき、子供心にも絶望を感じるようになりました。

この戦災のため、麓から鹿児島市内の女学校に通学していた女学生が犠牲になったり、麓の親類縁者や知人を頼って鹿児島市内から、疎開をして来る人々が増えてくるようになりました。

また、米機のパイロットが見えるほどに、低空飛行をするようになったことから、松ヶ崎の基地を狙っているのではないかと、地域の住民は空襲を恐れ山小屋を作って集落から離れました。

7月に入ってからと思いますが、麓集落も空襲を受け住宅が燃えるとか、バス停で女学生が機銃掃射を受け負傷するという事案もありましたが、それから終戦を山小屋で迎えるまで、集落も海軍の水上機基地（桜島基地）も被害はなかったように思います。

⑥ 松ヶ崎国民学校

昭和20年3月の卒業式（終業式）や、4月の入学式（始業式）などが行われたのか、また終戦後どのような形でいつから学校が始まったのか記憶にありませんが、確か国史の教科書だったか、先生から指示される特定部分に、スミで塗って見えないようにしたとかは憶えています。

71年前の終戦前後は、たいへんな時代だったのですね。肝心な6年生の時の担任の先生が、どなただったのかも思い当たりません。

